# Session/projectの成果と課題

八木文子
（地域教育文化学科　造形芸術コース）

## はじめに

『ヤマダイのお造り』2009　シャッターペイント

Session/projectは山形大学地域教育文化学部造形芸術コース絵画研究室の教員と学生を中心とした地域展開型のアートプロジェクトである。2002 年に開始されて以来、様々に形式を変化させながら実験的に活動を継続させてきた。制作や発表の現場を自ら生み出し、アートを取り巻く環境や交流の手段とする試みは、学生やアーティスト同士のネットワークを通じて、ジャンルや世代を超えた人的交流、知識や技術の横断・交換、新しい発想の創出、アイデア実現を目指したものである。2009 年以降、それらをベースにまちづくりや文化振興をテーマに掲げ、地域住民と協働して活動するアートプロジェクトとして始動し、毎年の開催を目指している。

本プロジェクトが担う役割は、大学の資産である研究や学生を社会の様々な機関と繋ぎ、プロジェクトを主体的にプロデュースすること、研究活動を積極的に地域社会に公開・発表することを通じて地域社会へと貢献する造形芸術振興の場面を設けることである。またこれらが多くの学外の多種多様な人たちの声を聞く機会となり、専門、非専門の枠を超えたパブリックコミュニケーションの場として機能し、新しい発想の創出やアイデアの実現として繋げることを目指している。

Session/projectはこれまで５年の間に三つのプロジェクトを実施した。ひとつはアートを通じてのまちづくりを実践する『ヤマダイのお造り』、自作によるゲル型移動式住居で移動しながらアクションを行う、『ぼくらは街を遊牧する』、地域の文化振興・継承を目的とする壁画制作『ふるさと壁画』である。三つの活動の基本的性格として、プロジェクトが学生主導によって実施し、学生にイニシアティブを取らせる形で進行させる点、アートというオルタナティブな視点を以て社会へ働きかける点において共通している。従来の授業形態の枠組みを越えた体験型の芸術教育活動としての試みである。

さらにSessionプロジェクトは大学のアウトリーチ活動としての視点から、その中心的性格として主に三つの目的を基に活動していると言える。

一つは大学芸術教育における知識の享受と技術習得の偏重に対しての見直し、シチズンシップという側面に有した教育活動の実践である。学内プログラム内では学生が習得する技術を社会の中でどのように活かすのかというノウハウを十分に教授出来ず、学生もまた社会的役割に意識する意識やその必要性を実感する機会を持てずにいる。プロジェクト内での活動は作品制作や展示のみでなく、地域住民との交渉や事業予算の準備・調整、地域社会住民や企業の声を収拾し、ニーズとマッチングさせる方法論などのアートマネジメント能力の育成を行いながら実際の社会参加により体験的に学びとることを目指している。

二つ目はアートを通して社会に働きかけ、街にクリエイティブで独創的な視点を持ち込むことでコミュニティを刺激し、共生社会で求められる他

者への想像力、多様性と寛容の可能性を追求する試みである。このようなソーシャルインクルージョン(社会的包摂)は、最終的に地域に暮らす人々が主体となりうる内発的発展に繋がってゆくというビジョンを提示する。一方で「アートは実際に地域社会の問題を解決するのか？」と言う問いは今後も取り組むべきテーマであるが、家族や地域社会など、人間の基本的な繋がりが希薄化する現代社会に対して、地域にコミットする「メディウムとしてのアート」の役割は今後も期待されていくだろう。

三つ目は大学の研究成果の活用としてのまちづくり、地域貢献である。大学の個性、特色が求められ、地域連携や国際交流を軸とした人材育成が図られる中、山形大学も「フレンドシップ事業」や「エリアキャンパスもがみ」など、地域連携を重視した活動が様々に行われている。「Session/project」はアートワークでありながら、地域のニーズや社会的要請を受けた継続的な活動として向き合い、地域社会の中で人々が世代を超えて集まり触れ合う交流の場や日常の中にある豊かさを表出する役割を担っている。

これらそれぞれの三つの活動理念＜教育＞・＜アート＞・＜地域貢献＞は相互に関係・共存しながら進行し、その成果は今後の活動展開の指針となっている。

同時に実際の現場ではいくつかの解決すべき問題も見えてきている。一つは、単年度予算で活動を行わなければならず、地域活動で不可欠な中長期的な視点が持ちづらいこと、また大学機関での取り組みは学生の有志スタッフにより運営されるため、人員的に常に不安定な状態であること、スタッフが年度毎に入れ代わり、継続した運営体制がとれないことなどがあげられる。

そして最も危惧しなければならないことの一つは、地域社会を舞台に展開するアートプロジェクトが、地域振興事業としての祝祭的なムードを醸成し、その‘まちおこし’的な盛り上がりがアート本来の命題を忘れて、単なるイベント、フェスティバルに堕してしまうことである。

以下、本論ではこうした課題、問題点も含めて、これまで行ってきた三つのプロジェクトのトライアンドエラーを繰り返し続けてきた経過報告として紹介したい。

## 1. ＜社会貢献＞から見たアートプロジェクト『ヤマダイのお造り』2009/2010/2012/2013

『ヤマダイのお造り』は山形県新庄市を舞台に2009 年より地域展開型アートプロジェクトとして始動した。2011 年の東日本大震災での活動停止を除き、本年度開催が４度目になる。本プロジェクトは新庄市教育委員会、NPO 法人芸術振興市民ネット新庄を主催として新庄市商工観光課、新庄市商工会議所、新庄市商店街の共催の協力を得て行われている。活動は大別して第一期の2009/2010、震災後の第二期 2012/2013 とに分けられる。

シャッターペイントは街を行き交う人も参加する

### 第一期

#### 1-1. もがみの地域活性化事業まちなかアートセッション 21『ヤマダイのお造り session2009』

新庄駅前商店街、かしわや鞄店両隣スペースを拠点とし商店街各店舗、新庄駅内“ゆめりあ”などを活用し約９つのイベントを実施。2009 年の９月 19 日から 25 日までの約一週間、学生約 30 名が街に滞在しながら運営・創作活動を行った。山形大学のサークルとセッションしたお造りライブのオープニングイベントを皮切りに、空き店舗を活用したコミュニティカフェ「まちなかカフェ＆ショップ YOC！」の営業、商店街数店舗のシャッターや看板へのペインティング公開制作が行われた。情報発信基地としての「ヤマダイお造り館」では商店街散策から今後の新庄を考えるフィールドワーク型の作品制作を行うワークショップの開催、その他にも「出張！工作教室」「ゆめりあストリートギャラリー」「Radio お造り」「まちなかセッションジャック」など各ブースで美術、音楽、パフォーマンス、ワークショップ等、ジャンルを超えた幅広い活動となった。エンディングでは活動を振り返るドキュメント映像が上映された。

すぎのこハウスとの共同商品開発“ヤマダイ焼き”おつくりオリジナルロゴが焼印される。

ヤマダイのお造り session2010『まちなかカフェ＆ショップYOC！』

### 1-2・やまがた社会貢献基金「やまがたまち並み作りサポート活動支援事業」学生・市民によるアートな商店街づくり事業－まちなかアートセッション22『ヤマダイのお造り session2010』

平成22年度協働助成事業やまがた社会貢献基金の助成を受け、参加者数の増員と開催内容を拡大し、12のイベントが同時進行で開催。2010年の9月19日から25日までの期間、レジデンス型で実施される。「まちなかカフェ＆ショップYOC！」「まちなかライブペイント」の継続の他、インフォメーションセンター「ヤマダイお造り館」では市民参加型での制作公開「タイのぼり」や新庄銘菓のパッケージコンペ、その他、新庄とのコラボレーション商品開発「ヤマダイ焼き」、民具を使ったファッションショーや民具小屋の展示、ゆめりあ内での「プレ卒展」、スタンプラリーなど様々なイベントが街中に出現。最終日には完成したシャッターライブペイントの「お造りナイトツアー」や音楽芸術コースとのセッションで声楽コンサートが行われた。一回目の実施をベースにした上でイニシアティブを学生に委ねる形で進行し、“お祭り”をイメージさせるシナリオで進行した。

『session2012 考えるカフェおつくりテッド』は味覚まつりの一角で開催された

### 1-3・『session2012 考えるカフェおつくりテッド』

2009、2010年にレジデンスで開催されてきた「ヤマダイのお造り Session/project」は2012年から「session2012 考えるカフェ　おつくりテッド」という企画提案型のイベントとして開催された。毎年秋に開催される「新庄市味覚まつり」の中で新庄を魅力ある街にする三つの企画のパネルプレゼンテーションを行った。提案された企画には来場者のアンケートを行い、その集計結果を今後の活動に反映、分析し、地域のニーズとのマッチングを図る手法として検討するという主旨である。これまでの一方向的手法から脱却し、長期的視点から街に暮らす人達との協働を促す新しい方法として考案された。

温泉媒染による草木染めワークショップはプロジェクト型活性化プラン「おつくり温泉ゆびゆ茶屋」に関連して考案された

『おやゆび太郎ワークショップ』はあくまでもオプション的な企画として実験的に実施されたが予想外に好評を得た

考案された企画は、温泉をゆびサイズの模型を街中に設置し、街の人との“指の混浴”を通してコミュニケーションを促す「おつくり温泉ゆびゆ茶屋」、新庄駅に、新庄祭りをモチーフにした新たなモニュメントを創造する「かざぐるま・おつくりＳＴＡＴＩＯＮ」、食環境デザインコースとのコラボレーション企画として、郷土料理をアレンジした料理の開発とふろしきパッケージのデザインをする「ちびふろしき＆おつくり食堂」の三つである。また、温泉媒染による草木染めワークショップを三つの企画に関連して実施するほか、「おやゆび太郎ワークショップ」は子ども対象の写真ワークショップとして開催された。

『キトキト環境芸術祭』に出品　鈴木奈緒さん（院２）の作品

**1-4・『キトキト環境芸術祭』×『ヤマダイのお造り SESSION2013』**

本年度は、「新庄市エコロジーガーデン交流拡大プロジェクト」実行委員会事務局により開催された「キトキト環境芸術祭」に参画した。かつての旧蚕糸試験場新庄支場である「新庄市エコロジーガーデン」の自然環境を会場とした、公募によるランドスアートのコンペであり、造形芸術コースの学生もこのコンペに出品した。また、これと同時開催された「原産の杜フェスタ」に『ヤマダイのお造り』企画として参加した。自作の「ゲル」（モンゴル式移動住居）の中で行う「おやゆび太郎写真ワークショップ」や、オリジナル雑貨の販売を企画。また、前年度のアンケート結果から食環境デザインコースとコラボレーションした“食”に関係したワークショップを企画した。山形県産の食材を用いた郷土の味を表現の学生が考案し、調理したクッキーをスタンプラリーの景品として用いるなど、ワークショップへの参加、企画の認知度向上が図られた。

企画はこの後、東日本大震災の被災地である宮城県石巻市に巡回した。

スタンプラリーで企画の活性を促す

**1-5・一期から二期への移行について**

第一期は学生によるレジデンス（滞在制作）を採用し、アート活動が街に浸透しながら人と人を繋ぎ、地域に創造的な刺激となることを目指した。若い表現者の活動が街の新たなエネルギーとなり、地域の人たちとの対話がはじまることで街の見方それまで気づかなかった日常の空間が変化の変容を促す。なかには「何をしているのか分からない」が、若い人たちががんばっている」ことが、街を明るくしてくれたという声もあり、日を重ねる毎に街の人たちの意識を少しずつ変えていくことに繋がった。同時多発的にアーティストが街にいる環境をつくること、街中で学生が帆走し、クリエイティブな動きが展開されれば住民もそれに関係していくことができる。その結果、街中に新しいイメージを見出すことが出来たのなら、第一の目的は達成されたといえるだろう。

しかしアーティストである学生達の働きかけで、

動き始めた街の活気もイベントが終わってしまえばもとの街に戻ってしまう。その要因のひとつは学生が地域の文化資産や観光資源を活かし、それをPRすることこそがアートプロジェクトの目的だと捉えてしまうことにある。

第一期初年度開催のプロジェクトは入念なフィールドワークも踏まえて考案された企画が充実した空間を演出し、地域住民との連帯感を得ることに成功した。この成果が評価され、第二回への更新の機会を得たのであるが、前年度をマニュアルとして捉えたため、表層的、且つ断片的な関わりがかえって地域との距離を生んだこと、また学生内でもアートとしてのリアリティを求める者と、地域振興的な“まちおこしイベント”として捉える者との意識のずれ、活動に対する理解が未消化なまま進行する姿も見られた。

「誰に対し、何のために仕掛けるのか」という根源的な問い、「この活動によって地域がどのように変化し、どうしたら街の人たちの日常に繋がるのか」という意識を持たなければ街の内発的発展には繋がらない。その後の2011年に発生した東日本大震災での復興活動の学びから第二期にはこれまでの活動内容を以下のようにシフトした。

短期レジデンスは採用せず、街主催のお祭りやイベントに参加し、街の声をリサーチすることから始める。一過性のイベントではない将来を見据えた長期視点からのプロセスに重点をおく構想から、継続的なプロジェクトを考案するというものだ。これまでのこちら側からイベントを提供し、街の人達が享受・応援するという方法・構造からの脱却である。2012/2013の活動は「新庄市味覚まつり」や「キトキト環境芸術祭」の中で行われたもので、一見、以前と比べて規模の縮小したかに見えるが、ニーズとミッションの明確化、街との意識共有などから慎重にプランを練るための必要なプロセスだと捉えている。

これまで2回目の助成金を受けての実施を除いて、常に資金力と人員の制限と向き合いながらの活動であった。資金力は無論重要であるが、活動の成功と必ずしも比例するとは限らない。重要なのはミッションの明確化、慎重且つ魅力的なプラン考案と実施するメンバーの熱意、アクションをやり抜く実行力である。それらは常に、「自らのクリエイティビティを社会に対してどのようにリンクさせればアートが生きづいたものになるか」という問題意識に基づいたものでなければならない。

『ぼくらは街を遊牧する』企画フライヤー

## 2. アートプロジェクト・＜アート＞の視点から『ぼくらは街を遊牧する』−まがりProject vol・2 七日町ノマド計画

本プロジェクトは平成22年の1月、文科省大学教育推進プログラムで採択されたものである。事業として実施されたプロジェクトである。「awayをhomeにする」というミッションを掲げ、自作したゲル（＝移動式住居）で山形市七日町の複数店舗や会社などの公共スペースをオルタナティブな場として「間借り」し、移動しながら7つのアクションを実施するというものである。活動は七日町、秋田県大館市、山形新庄市、市内小学校でアクションした後、2011年以降は東日本大震災の被災地となった宮城県石巻市や原発事故による避難者がまだ多くいた米沢市の仮設住宅地区へ遊牧した。

手作りのゲルは可動式。リアカーで運び現地で組み立てる

## 2-1・活動記録

**1・アクション『ぼくらは街を遊牧する』**デパートの空きテナントや通路、公共施設などのパブリックスペースにゲルを設置する。1,2 日の滞在の後ゲルを解体、次のスペースへと移動する。

■　移動地

①山形県山形市内 2009/2/20～2/28（NAMA BEANS→山形銀行→山形市役所→as 七日町→ARC）②秋田県大館市内 2010/8/12～8/17（JR 大館駅→旧ラーメンハウス→いとくショッピングセンター→（株）イトウビルド管理ビル）③山形県新庄市 2010/9/9（日清小学校）④山形市内 2010/10/30（市内小学校）⑤山形市内 2010/12/13（霞城セントラル）⑥米沢市第二小学校教室内 2011/5/26⑦米沢市上杉博物館エントランス広場 2011/5/28⑧石巻市中里地区新境谷地南公園応急仮設住宅前 2011/9/12⑨石巻市水押地区仮設住宅団地前駐車場 2011/10/23⑩石巻市水押地区仮設住宅団地前駐車場 2011/10/30⑪石巻市水押地区仮設住宅団地前駐車場 2011/11/5,13,27

他現在も継続中

**2・『まちなか滞在記』**

遊牧滞在中の過程で遊牧民（メンバー）が周辺を散策し、住民とのコミュニケーションを図る。身近な（＝home）場として街・人と交流する。

**3・『遊牧ドキュメンタリー』**

プロジェクトのアーカイヴ映像作品を随時作成。遊牧中のゲルの壁面に上映する。

**4・『まちなか放牧中』**

複数店舗のショーウィンドウに間借りし、羊のオブジェを設置（＝放牧）させる。遊牧の PR としての役割を担う。

**5・『ジャム・ウルトー・タニル（道・駅・出会う）』**

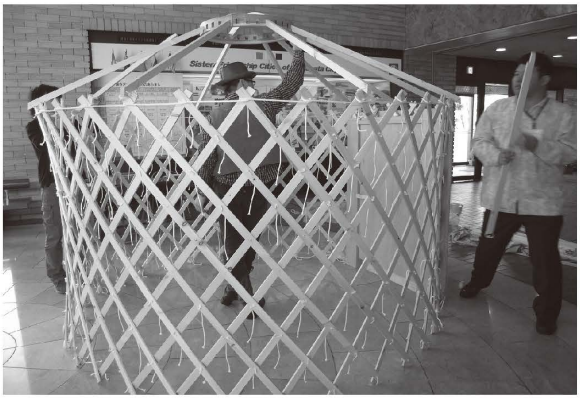
道行く人に、モンゴル式ミルクティーを振る舞い、ゲルの中でささやかでゆるやかな時間を共有する。

**6・『まがり印刷所』**

ゲルとともに移動し、ガリ版による「まがり通信」を発行する。遊牧や移動中の出来事などの情報を記事にし、商店街の人たちに手渡しで配布する。

**7・『まちなかまがりカード』**

まがり印刷所発行のカードとゲル型のカードスタンドを街の商店街飲食店のテーブルに設置する。



第３移動地点　山形市役所

## 2-2・コンセプト

**■コンセプト①＜居住・遊牧＞**

日本人にとって“遊牧“は馴染み難いが、永い人間の歴史を見ると定住生活は最近の出来事と言える。人間の生活スタイルには定住と放浪という二つの側面があり、国や地域を跨いで移動したいと思うときに実行できる個人の自由が尊重されれば人は再び遊牧民＝ノマドに戻る。今や日常的に使用される携帯電話は人の居住を不明確にした。テレビやゲーム、インターネットなどバーチャルなものを使ってノマド生活を送る現代人はいわば“バーチャルノマド”として個人の自由を獲得する一方、客観的で人工的な生産物（ex.時計）により毎日を規定されながら生活している。

**■コンセプト②＜時間性＞**

現代社会の「時間」は機械により刻まれる全世界共通の単位に支配されていると言っても過言ではない。現代は客観的で人工的な生産物により毎日の生活のリズムが決められ合目的的合理性に基づいた測定可能な時間で生活している。しかし人は内的時間（個人の内的経験、感動などで体感する時間）を経験している。内的時間は測定不可能であるがその知覚は変化に富み、人の生と深く結びついている。外的時間や場に縛られる現代人の日常は個人的な内的時間の確保が難しく人間関係や家族関係にも影響し希薄化したコミュニケーションの中で生きる生活環境にある。現代の複雑に文化した社会において、個々人の内的時間と社会規制による束縛が直接に衝突すると社会矛盾が顕在化し、個人のライフサイクルに支障をきたす。

ゲル内ではモンゴルティーが振舞われ、道行く人とのコミュニケーションが図られる

■コンセプト③＜日常を変える＞

私たちの日常は、もはや自然な(＝昼夜・季節のリサイクル、生死の人生のサイクル)ものではなく、主観的な(＝行為者の知覚や経験) ものでもない。社会における可視的変動は日常的経験とはかけ離れて見え、軽視されがちであるが実は社会と生とを繋ぐ密接な関係性を持っている。

本プロジェクトは社会の中で埋もれてしまった本来的な日常性に焦点をあて、自由な時間と空間を演出しようとするものである。仕事場や銀行、市役所などに外的時間で訪れた人が、思いがけず内的時間に遭遇する。自然で主観的な時間は人間の精神生活における日常性の蘇生を促す貴重な経験となる。

まがり印刷所発行の新聞はガリ版で印刷され、商店街の人たちに手渡しで配布される

■コンセプト④＜ウチとソト＞

会社や家族という存在が多様化、流動化している現在、少子高齢化という人口構造の大変化やバーチャル社会がもたらす弊害など、人と人との関係の希薄化が現代人のライフサイクルに大きな影響を与えている。現代日本は「空気を読む」といった言葉がよく使われ、集団のなかでは過剰に同調性が求められる。一方集団を離れるとだれも助けてくれないといった「ウチとソト」の落差が社会現象となって人々のストレスを高め、高い自殺率も含めて、生きづらさや閉塞感の根源的背景になっている。“Away＝「ソト」が home＝「ウチ」になっていく“というコンセプトは主体性を保ちつつ他者を能動的に受け入れるという、社会との新たな関係性を意図している。日常空間を間借りして人と人が偶然に出会う、新たなコミュニケーションのハブとして機能する。

山形市　山形銀行本店

秋田県大館市 JR 大館駅

### 2-3・街中で『ぼくらは街を遊牧する』を展開することの意味と課題

ゲル＝（モンゴル語で「家」、「家族」を意味する）は街の人たちのコミュニケーションを誘発し、ウチとソトの境界、創る人、見る人という一方通行を解体する。場によって変化する人間の生き様や価値、問題を浮き彫りにし、いつもと違う視点を定住者に促す。定住者（＝地域の人々）が安定性・継続性を提供する一方で一時的な居住者（ゲルで移動し活動し続ける新参者）はクリエイティブを用いて融合を生み出す多様性を相互に提供する。メンバーはプロジェクトの企画段階から活発な意見交換を繰り返し、ミッションの明確化とコンセプトの共有が図られる。しかし場の確保、街との交渉など地域実践するまでの様々な活動は社会の恒常性のために難航する。街の恒常性を突き崩しながらも平和的友好的手段を取ること、プロセスとアウトプットを分けない総合的視点が必要とされた。誰も予想し得ない様々なコミュニケーションの場の生成こそが、このプロジェクトの本質であるとしたら、作品の強度と向き合いながらアートに関心のない人々にもアプローチできる専門性との領域横断性の両立こそが求められる。

アートとまちづくりは常に同じベクトルを向いているわけではない。両者の矛盾を認めつつ弁証法を越えた展開と、タフさを持ち備えた活動を継続することが地域にコミットするアートプロジェクトの最大の魅力であり存在意義であると考える。

訪れた人との記念撮影はアーカイヴとして記録される

2010年壁画プロジェクト『優しい時間と思い出の中田（まち）』

### 3. ＜教育的視点＞から『金山壁画プロジェクト』

本プロジェクトは金山町中田地区の国道 13 号線主寝坂道路下のボックスカルバート内に地区の古里に関する風景、思い出、四季折々の伝承行事などを表現した壁画制作を行うもので、児童生徒の地元志向や地区民の心の拠り所として後世に伝えることを目的としている。平成 21 年度から実施している壁画制作企画は今年で第４回目を迎え、2 回目からの制作を請負うこととなった。制作学生はレジデンスによる滞在制作と中田小学校児童の制作体験、僻地教育の実態文化や行事体験としてとしての指導にあたる。

『優しい時間と思い出の中田（まち）』制作最終日

### 3-1・活動記録

#### ■　2010年『優しい時間と思い出の中田（まち）』

有志の学生８名が９月２日から約 10 日間の滞在制作により子ども達の夢、思い出スケッチから金山地区の四季の流れを表現した壁画を制作した。期間中２日間は中田小学校児童生徒と共に制作にあたり制作体験の指導を行う。壁画は10月20日に完成し、町長も参加する盛大な除幕式が催された。総壁面、縦 1.8m、横 21.6m。

2012 年『主寝坂の思い出、流れゆく四季の詩』

■　2012 年『主寝坂の思い出、流れゆく四季の詩』

新道開設のため移住を余儀なくされた７軒の主寝坂地区民を対象に学生１名が壁画制作にあたる。壁面積縦１．８ｍ横１６．２５ｍ。滞在期間制作約 14 日間。次年度に閉校する同地区の中田小学校児童生徒の僻地教育を取り入れながら地域を囲む四季の生活を描いた。１１月１日に行われた除幕式は同月２日の山形新聞朝刊、９日の朝日新聞、14 日の毎日新聞、金山町の広報誌「広報かねやま 2012, 12 月号」に掲載された。

2012 年の制作。中田小学校の児童生徒の制作指導にあたる

■2013 年『中田の情景 - 人々の暮らし営み・自然への祈り』

金山町立中田小学校が 138 年の歴史を経て廃校になることから、子供達の記憶、それぞれの思いに焦点を当てた壁画を学生 3 名が現地に滞在しながら制作した。人と自然の共生をテーマに金山の動植物、町景観や伝承行事が表現される。壁面縦 2.1m横 18m。12 月 4 日に除幕式が行われ、山形新聞（9 月 13 日）、ゲツキンラジオぱんぱかぱ～ん（ラジオカーリポートコーナー）（11 月 26 日）などに取り上げられた。

2013 年『中田の情景 - 人々の暮らし営み・自然への祈り』部分

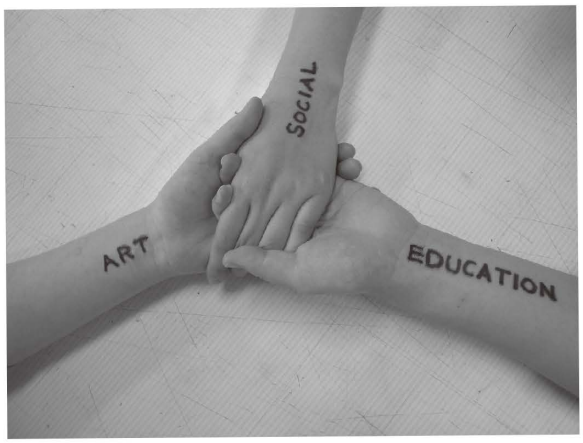
### 3-2・壁画制作による教育的効果

この壁画制作の取り組みは、山形県最上郡金山町が地域の活性化・文化の保存を目的とする「町並み作り 100 年計画」との連携事業である。中田小学校児童達の夢や思い出、地区に残したい文化や行事などのアンケート資料を基に原画を作成、制作の手順を決め、制作に入る。雨に見舞われると壁面に結露がおこり、描いた部分は流れてしまうなど、学生たちはこれまでの学内環境とは大きく異なる“自然”と対峙しながら作業しなければならない。通常の学内制作品と異なり、地域に残されることが地域市民と次世代を担う彼らの守るべき価値観や新しい観点について確認しあう場となった。

地域と地域住民の文化的価値理解に努力し、表現することで地域活力の向上に貢献するのだが、実際には学生自身こそが活動の中から大きな収穫と呼ぶべき課題を得ることになるのである。学内での知識偏重教育、デザイン思考では得られない貴重な学びの場でもある。

2010 年除幕式　中田小学校の子どもたちと

## 4. 総論




### 4-1. ＜教育・アート・地域貢献＞の関係性

「プロジェクト」とはアウトプットだけではなく、企画の立案から実現までのプロセスが含まれる概念である。サイトスペシフィックな場とそこでしか成立しない表現を求めるとすれば、そのフィールドを拠り所としたシステムの構築を複数人で対話していくことが何より重要である。

大学の学生チームがその主導権を握ることによって得られる利点は、理論偏重傾向にあるマニュアル化された学習イメージや価値を多元的に刷新し、実践的環境における多様な価値観に対する対応力を見に付けることが出来ることにある。往々にして実践する環境が他者に整えられた活動は本人たちのモチベーションを高めない。チームで活動する学生メンバーはプロジェクト初期段階から主従の構図を脱した意見交換によって自分のヴィジョンを語り、お互いを触発し合う。企画のプレゼンから始める行為によって社会的評価に繋がる責任を実感する機会として意識され、己の存在理由と社会的役割を意識するのである。必ずしも成功が保証されていないという状況と企画が認められることの達成感がモチベーションを高く保つ原動力となっている。

また、専門化の色彩が濃いアートワールドにおいてもその慢性的な閉鎖からの脱却、専門性を高める過程で希薄になりがちな各種領域のとの繋がりを補い、バランス感覚と実践力を併せ持つ専門領域人の育成を可能にしている。オルタナティヴなプロジェクトのサイトスペシフィック志向は通常の展覧会芸術、ホワイトキューブの展示では実現できないリアリティを手に入れる手段である。

しかし“協働の場”を組成することがベースとなるアートプロジェクトにおいては、芸術がその内部のみで循環されるものではなく、教育としての利点、成果が最終目的ではない。大学がアートプロジェクトを運営することで危惧されるのは常に‘教育・芸術・社会’の交点にある。問題は如何にしてアクチュアルな場を社会に提供できるか、アートは如何なる社会的機能を担うのかという課題、その要請に学生が学び、地域共に進化を遂げられたとき、大学は社会と架橋するインターフェイスとしての役割を担える機関となる。

様々な観客（オーディエンス）と関わりながら社会との交点を持つアートプロジェクトにおいて、通常、学生が介入する仕方で「地域」に歴史に裏付けられた土地としての意味を重視しすぎると、芸術との距離を縮められない事態を生みやすい。アートが分かりやすい、口当たりのよいイベントへとすり替えられていく過程で表現のリアリティも欠如し、同時に教育的意味・効果も薄れていく。

しかし一般に「公共」をテーマにした町興し的企画は地域に理解されやすく、また助成も受けやすいようだ。まずは地域が受け入れるものを前提としていない‘アート’という視点で地域住民を‘巻き込む’という計画立案と実践のためには、一方通行的なトランスミッション的なスタイルではなく、共にテーマと向き合うトランスアクションとしての姿勢を保ち、アートのベクトルを多視点に捉える学びの場にならねばならない。

そのヴィジョンは従来の様な非日常的な場の構築という手法ではなく、生活環境の変化や生活様式の移動可能性など現代の高度に情報化された社会に対応し、一個人を単位とするコミュニティベースに「地域」という概念を重ね、社会の境界を超えて複合し、日常的な生活の場へ浸透するようなプロジェクトを考案する必要がある。

### 4-2. ＜教育・アート・社会＞の可能性

近年、アートを積極的に社会に提供しようとするマネジメントの必要性が強調されるようになり、アートが専門家占有のものから、創造たる万人が社会に対し創造的に働きかける芸術家である<J・ボイス>[1]として再定義が進んでいる。また現在は、シュリンクする社会への想像力、個人主義とコミュニティ、グローバリゼーションとローカリゼーション、東日本大震災などによるショックなど、すぐには答えの出ない問題・課題に対し、アートがひとつの切り口となりえるのではという可能性が模索されている。

ドゥルーズ＝ガタリは『アンチ・オイディプス』

(2)において資本主義の解体した伝統的「意味」とヒエラルキーの解体を「脱コード化」「脱領土化」と呼んだ。「まがり Project『ぼくらは街を遊牧する』」はこうした交換価値の思想の展開とも言える、既存の社会コードの解体を試みた実験的な活動であったわけだが、これが一部単なる国際交流として捉えられると、アートとは異なる文脈でミッションがすり替えられてしまう。

「私たちはものごとを「全体」として限なく秩序づけたい－という妄想を抱き、努力する傾向がある」とカント(3)は述べた。社会は常に法、契約、制度というコードに従い、官僚的構造に縛られ生活する。人間がコード（意味/記号）に従って対称を翻訳・解釈をする限り、秩序だって構成する社会のメカニズムは人が生まれもっているものを覆い隠し、触れ合うことを難しくするだろう。

決まったコードからの解釈を超え、純粋に外と直接接続する、流動的且つ活動的に生み出される自由な思考回路で構成される共同体を形成するムーブメントを作り出すためには、ある意味「枠」から「外れた」発想、「リゾーム〈地下茎〉」(4)のように中心がなく階層秩序意識のない未来社会構想に人間の在り様を捉える姿勢が重要になるように思える。

常に更新される現代社会に芸術もまた、その様相は変化する。4 年間の活動を振り返り、大学が取り組むアートプロジェクトの具体的問題解決を難しくしているのは、‘教育・芸術・社会’それぞれが連関し、連動していることにある。それら解決の鍵はプロジェクトが固有のリアリティを獲得しようとする姿勢、“セルフエデュケーション”の在り様を獲得するためのマニュアル化されない思索とそのアプローチにあると感じている。さらに大学が運営する上で学生達の目的意識と理解度、モチベーションは想定外の収穫をもたらすひとつの可能性でもある。

さらには“教育・アート・社会”の三つの理念それぞれが柱となるツリー構造にならず、異分野の知を自由に横断するようなリゾーム的手法をとることではないだろうか。アートプロジェクトの概念をその時代ごとの焦眉の問題に対応するために、絶えず生成変化させていくということ。アートの魅力的なアクションとして、芸術と地域の架橋を試みる取り組みが学生のポジティブな発想力によりこれからも発信されることを期待するものである。

## 註

(1) ヨーゼフ・ボイス（1921·1987）。芸術的要素が社会に果たす最大の貢献が快楽の付与であるとして、イデオロギーへの美化のメカニスムに加担する支配権力から身を引き離し、芸術をして再び人間の心理を体現するクリエイティビティへと救い出す思想「社会彫刻－すべての人は芸術家である」は芸術と社会、双方へのアプローチとして捉えることができる。

(2) ジル・ドゥルーズ（1952）とフェリックス・ガタリの第一の共著『アンチ・オイディプス－資本主義と分裂症』（1972）は 68 年にフランス学生・労働者の反体制運動（五月革命）に揺さぶりをかけ、70 年代以後の日本においても精神分析の基礎である父親中心の核家族を単位とした近代国家へのアンチと要約できるスローガンとなる。

(3) トマス・アクィナス（1274）の秩序づけられる人間的努力を神学的思想として把捉するものとは質を異にするがカント（1724）によれば道徳法則に従うことが善であり、全体として各個人に共通する純粋理性の理想において究極的目的を道徳法則として秩序立てる。

(4)『アンチ・オイディプス』から約 10 年後『千のプラトー』は他方向へのダイナミズムを「リゾーム」という概念で再定義する。日本において受容を定着させたのは 81 年から青土社の『現代思想』に掲載され、バブル景気が本格化する手前の 83 年に出版された『構造と力』、翌 84 年の『逃走論』による。

## 参考文献

VolherHarlan:Was ist Kunst Werksattgespach mit Beuys,Urachhaus,1986 p.15

ドゥルーズ＆ガタリ『アンチ・オイディプス－資本主義と分裂症』（上/下巻）宇野邦一訳（河出文庫 2006）

ドゥルーズ＆ガタリ『千のプラトー－資本主義と分裂症』（上/下）宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳（上/中/下巻）（河出文庫 2010）